

里山ボランティアにおける自由の条件

——人間－植物関係の批判社会学試論

松村 正治(人間環境学科)

1. はじめに

社会園芸学(Sociohorticulture)という学問がある。松尾英輔によれば、従来の園芸学が、おもに植物学をもとに生産の向上を主題としたプロ向きの分野(生産園芸)であったのに対して、社会園芸学はそのオルターナティブとして誕生した学問分野である。今日、アマチュア園芸・家庭園芸は広く市民に親しまれているにもかかわらず、アカデミズムではほとんど無視されてきた。しかし、市民が暮らしのなかでかかわる園芸こそ、園芸の公共的機能・多面的機能がみられる領野である。そこで、市民生活にかかわる園芸を「社会園芸」と称し、園芸に含まれる広さと深さを表現するとともに、この社会園芸に関する学問分野として「社会園芸学」が登場した(松尾 2005: 25)。

社会園芸学は、園芸福祉、園芸療法、教育園芸、園芸文化論、園芸心理学、アマチュア園芸・家庭園芸など、広く人間と植物とのかかわり(People-Plant-Interaction)に関する多様な分野を含む。そして、市民農園、グリーン・ツーリズム、園芸ボランティアなど、最近の重要なキーワードを対象にすることができる。このような園芸(学)の動き、すなわち、主としてプロ向きであった学問が一般市民へと視野を広げることになったという動向は、農学や林学(森林科学)においても同様に見られる。たとえば林学もまた、従来は木材生産の向上を主題として、プロの林業家の側を向きながら発展してきた。しかし、今日では森林の公益的機能・多面的機能が強調されるようになり、人間と森林とのかかわりに関する分野、たとえば、森林ボランティア、市民調査、森林ガバナンス、森林療法、木育などを対象に含みながら展開している(内山 編, 2001; 山本編, 2003; 北尾, 2005; 上原, 2005; 蔵治ほか編, 2006,)。

このような人間－植物関係をめぐる研究動向の背景には、2つの共通した社会的要因があると考えられる。まず1つは、再帰性が高まっている現代社会（後期近代）にあって、市民社会はますます科学に依存するようになるとともに、より一層科学は説明責任を果たすことが要求され、市民社会と離れて存立できなくなっているという社会システムの構造がある（Beck et al, 1994=1997）。そしてもう1つは、今日の社会問題や環境問題の本質的な原因として、人間－自然（植物）関係の遠隔化／不可視化が疑われており、この関係性を変えていく1つの方向性として、プロだけがかかわる狭くて堅い関係から、広く市民がかかわる柔軟い関係へと組み換える必要性が生じていることである。したがって、私たちは園芸学や林学などの学問領域を超え、広く人文・社会科学の視点も取り入れて、現代の人間と植物の関係性を分析していく必要があるだろう¹。そこで、本稿では、人と植物とのかかわりに関して興味深い事例を提供してくれる森林（里山）ボランティア²を社会学の観点から取り上げ、批判的な分析を試みることにした。

環境ボランティアの数は1990年代から着実に増えているが、その中でも森林（里山）ボランティアの急増は目覚ましく、1997年に277だった団体数が2006年には1,863へと大きく増加している（林野庁, 2007）。こうした傾向に対応して、これをテーマとして扱った研究も盛んになっている（鳥越編, 2000; 山本編, 2003）。これらの研究群に含まれる論点は多様であるが、そのなかには、環境ボランティアの増大を、環境問題における社会的ジレンマを解消するものとして期待する向きがある。これまで、社会的ジレンマ論では、環境問題を「共有地の悲劇」と捉え、そこに認められるフリーライダー問題³

1 日本では2001年に人間・植物関係学会が設立した。

2 保全生態学者の倉本宣が与えた定義によると、「里山ボランティア」とは「二次的な自然を活動の場とするボランティア」である。したがって、森林で活動する「森林ボランティア」に重なる部分が大いだが、「里山ボランティア」には農地での作業も含まれること、「森林ボランティア」の場合、里山に対して奥山で活動するというニュアンスが含まれることに違いがある。

3 オルソン（Olson）によって提起されたもので、この文脈では、環境が非排除的な集合財であるとき、良好な環境は、それを享受しうる全ての人びとに等しく分配されるため、合理的で利己的な個人は、環境を保護・創造するために自ら時間や労力をかけない、つまり、ボランティア活動を実践しないという問題（Olson, 1965=1983）。

に対して、解答を与えようという試みがなされてきた(盛山・海野編, 1991)。そうした観点から長谷川公一は、「市民が環境ボランティアになる可能性」を検討し、協力者に報酬を与えるような選択的誘因が有効でない環境ボランティアを育てるためには、適切な目的的誘因と連带的誘因⁴を提供することが重要であると指摘している(長谷川, 2000)。

なるほど、今後、環境ボランティアが増えてゆくことは、さまざまな環境問題を解決していくために望ましいことだろう。しかし、そのために選択的誘因を提供して、環境ボランティアを育成しようと企図すると、ボランティアの自律性が失われるのではないか⁵、自発性を有するはずのボランティアが動員されるという矛盾は生じないのだろうかという素朴な疑問が生じてくる⁶。こうした問題意識から、環境ボランティア論のなかでも、ボランティア活動の必要性が説得的に語られてきた里山ボランティアに着目した。以下では、従来の議論を整理した上で、事例調査を通して里山ボランティアの自律性や意義について考察していく。

2. 里山(森林)ボランティア論の整理

1) 二次的自然を適度に攪乱するボランティア

今日、里山という言葉は広く知られ、里山保全が必要であるという認識が社会的に共有されてきた。2002年に策定された「新・生物多様性保全国家戦略」以降、里山への手入れ不足が日本の生物多様性を脅かす3つの危機の1つ「第2の危機」として挙げられている。

4 目的的誘因とは、良好な環境をつくりだすという目的の達成に喜びを感じるようにすることで、連带的誘因とは、他者との関わりのなかで喜びを感じるようにすることを意味する(長谷川, 2000: 179)。

5 この問題は、内発的動機づけ(intrinsic motive)に関連して、心理学・教育学・社会学などで議論されてきた。内発的動機づけとは、賞罰による外的動機づけに対して、活動それ自体以外に誘因のいない動機づけのことで、「外的報酬は内発的動機づけを低下させる」という命題に対しては論争が絶えない。

6 園芸を教育の柱の1つに位置づけている恵泉女学園大学では、諸施設・団体から学生に園芸ボランティアとして来てほしいという要望がある。しかし、その多くは管理できない花壇を手入れしてほしいというもので、学生にとっての喜びや成長などが考慮されていない。単に人手不足をボランティアで解消できないかという考えが少なくない。

しかし、人びとの関心が里山に向かうようになったのは比較的新しい。それまでは、植生自然度を重視した環境評価が主流だったので、原生林や鎮守の森を保護することは理解されても、里山が重要な空間だとは認識されていなかった。このため、燃料革命・肥料革命以降、経済的な利用価値を失った里山は、都市の外延化の波に飲まれて開発されるか、管理を放棄されて遷移の進行を招くかして、量的な減少と質的な劣化を招いていった(重松, 1991; 石井ほか, 1993)。

一方、1980年代後半から、里山の消失に対抗するように、これを再評価する動きがみられるようになった。まずは、環境評価の指標として植生自然度を重視することに対する批判があった。自然度の高い極相林といえども決して静的に安定しているわけではなく、強風や枯死で高木が倒れたりすることで適度にギャップができ、それによって活力が与えられるというダイナミズムが明らかにされ、環境の価値を一元的にみる見方は後退した(武内, 1994)。また、生物多様性の点では、原生自然よりも里山のような二次的自然において、多くの生物種が育まれる例が確認されたこと、さらに日本の里山は単なる代償植生ではなく、古い氷河時代の遺存種を温存してきた貴重な生息空間であるという有力説が提出され、里山は固有の価値を有するものとして高く評価されるようになった(守山, 1988)。

このように里山は、急速に減少・劣化すると同時に再評価の気運が高まり、保全の必要性が広く認識されるようになった。ところが、二次的自然である里山の保全には、原生自然を保存する場合と異なり、適度な攪乱が不可欠である。また、里山の保全活動は、経済的価値を生み出すことがほとんど期待できず、営利団体が乗り出すことは考えにくい。そこで、里山をどのように保全していくのか、とりわけ放置されて遷移が進行している里山を誰が適切に管理していくのかという問題が浮上してきた。

ここに及んで、経済合理性を第一義とせずに活動するボランティアが、里山の管理者として待望されることになった(重松, 1991; 中川, 1996; 倉本・内城編, 1997)。そして、実際に1990年代から今日にいたるまで里山ボランティアは飛躍的に活発になっており、意欲的に保全活動をおこなっている例は全国的に見られる。

2) 社会的ジレンマを解消するボランティア

里山保全活動を実践するボランティアが増えるにつれて、里山ボランティアとは何者であるのか、つまり、どういう役割を担う者であるのかについて、議論が深められてきた。

里山ボランティアがイギリスのBTCV(British Trust for Conservation Volunteers)にならって日本に紹介された頃は、荒廃した里山を管理する「担い手」としての役割が期待された(重松, 1999)。しかし、実際に経験を重ねると、ボランティアが安全に作業できるのは、地形的には比較的平坦で幼齢木からなる場所に限られること、また、ボランティアの作業能率では、広い面積の整備が難しいことなどが明らかになってきた。

こうした里山ボランティアの限界は、ボランティアを「担い手」としてみなす見方に修正を迫ることになり、別の役割が期待されるようになった。それは、ボランティアを環境教育の「学習者」とみなすものである(山本, 1998; 内山編, 2001)。たとえば、山本信次は里山ボランティアと重なる部分の多い森林ボランティアについて語るなかで、「今後の森林管理における市民参加活動、特に民間非営利団体の存在意義は、ボランティア活動としてのみならず、『森林ボランティア』という『体験学習』活動を通じて、森林問題を自らのものとして捉える市民を増加させ、様々な形態で森林管理に参加することを促すものであり、非常に重要である」(山本, 1998: 27)と述べている。

たしかに、里山ボランティアを環境教育の「学習者」として捉えれば、作業能率の低さをめぐる問題は解消されよう。かえって、狭い面積で多くのボランティアが活動するならば、環境学習の効率性は高いとも言える。しかし、ボランティアが「担い手」であれ「学習者」であれ、期待されているのは里山保全への貢献であることに違いはない。「担い手」としてみなすときは、直接的な保全活動が期待され、「学習者」としてみなすときは、ボランティアが学習を通じて環境配慮的な性向を身に付け、結果として何らかのかたちで里山保全に寄与することが期待されている。いずれにせよ、里山(森林)ボランティア論では、里山を公共的空間とみなし、利己的個人では保全活動に協力しないために潜在的な公益機能が発揮されないとする社会的ジレンマについて、この

構造を解消する役割をボランティアに期待するのである。

3) 自律的な市民としてのボランティア

里山ボランティアがこのような期待されるとき、自発性を有するはずのボランティアが政治的にコントロールされるのではないかと問題提起されることがある。近年の市民社会論では、この問題が「ボランティア活動とネオリベラリズムの共振」として把握され、議論が深められてきた(渋谷, 2003; 仁平)。ここでは、中野敏男の「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」を参照しながら、この問題を考察していこう(中野, 1999)。

中野は、ポスト福祉国家(である日本)において、ボランティアが安上がりで実効性の高い行政の補完物として動員されうることには注意を促したうえで、メルッチ(Melucci)の「個人化のポテンシャル」(Melucci, 1989=1997: 47)を援用して、「ボランティアという生き方」が求められている現状を分析している。ここで、「個人化のポテンシャル」とは、アノミー化と異なり、「自由の閉塞性」が一方向的に進むのではなく、「自由の可能性」も一体となって進行することに注目する概念である。かつては、特定の社会集団に帰属していることによって、個人のアイデンティティが保証されている部分が大きかったが、今日では社会集団の拘束力が弱体化しているため、諸個人は確固たるアイデンティティを形成することが難しくなっている。しかし、このことは単に個人のアイデンティティを不安にさせる方向だけでなく、一方では「別様でもありうること」を自覚する契機となり、現状と自己への反省を促進する。このように「個人化のポテンシャル」とは、自由の両義性が同時に顕在化してゆくさまを捉えるときに有効である。

この「個人化のポテンシャル」への対策として、中野は相互に補い合う2つの方向への方策が追求され始めていると診断する。そのひとつは、「今一度『わたしたち』という意識をかき立て、現状の社会システムの担い手としてその役割への忠誠を求めるという方向」であり、もうひとつは、「現状とは別様なあり方を求めて行動しようとする諸個人を、抑制するのではなく、むしろそれを『自発性』として承認した上で、その行動の方向を現状の社会システムに適合的なように水路づけるという方策」(中野, 1999: 86)である。そして、今日のボランティア動員型市民社会では、ボランティアは自発的に行為を選

扱っているようにみえても、実は社会システムに適合するよう政治的にコントロールされており、ボランティアの自律性は損なわれているかもしれないというのである⁷。

こうした議論を踏まえた上で、里山(森林)ボランティア論では、最近のボランティア活動が、大正年間から始まる愛林運動や戦後の国土緑化運動といったボランティア動員型運動とは異なり、自律的な市民活動として扱われているものと解釈される。そして、これまでの中央集権的な森林管理政策が、戦後の過剰な人工林造成に代表されるように硬直的で問題の多いものであったことから、今後は、市民参加型の新しい管理体制を生み出すことが必要であるとし、そのための「ゆりかご」としてボランティアが機能しうると評価されている(山本, 2003: 17)。

しかし、このような水準でボランティアの自律性を評価することは、中野のような批判的言説に対して格好の事例を提供することになる。山本は、ボランティアを行政主導型と市民主体型とに分類し、今日のボランティア活動は前者から後者へと大きく移行している段階であると分析しているが、まさにこのような状況を「ボランティア動員型市民社会」として批判理論は捉えているのだから。

それでは、ボランティアには政治的コントロールから逃れることはできないのだろうか。この議論を先に進めるために、ここでいったん理論的な考察を止め、3章と4章で具体的な事例を見た後に再び検討していくことにする。

ケース・スタディとしては、「恩田の谷戸ファンクラブ」(以下、OYFC)という里山保全団体を取り上げる。そして、ボランティアが社会的に果たしている機能ではなく、ボランティアにとっての活動の意味を把握するために、所属会員の参加動機に注目して分析する。なお、OYFCを取り上げるのは、同じ時期に調査したほかの2団体⁸より、性別・年代などの属性に広がりがあった

7 これに対して大澤真幸は、自己決定論批判に対して再批判するなかで、中野のような解釈を斥ける。大澤によれば、「自己決定は、自己決定でない限りにおいて——超越的な他者に準拠している限りにおいて——自己決定たりえてい」るからである(大澤, 2000: 180)。

8 筆者は、OYFCのほか、「町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会」と「せたがや自然環境保全の会」に入会して調査をおこない、3団体に所属する里山ボランティア42名にインタビューを試みた。

からである。

3. 里山ボランティアの素顔

1) 恩田の谷戸ファンクラブの概要

1991年、住宅造成地に隣接しつつも昔ながらの風景を残す「恩田の谷戸」(横浜市青葉区)がテニスコートになるという噂が立った。これに対し、その谷戸を守ろうという地元住民が集まって設立したのがOYFCである。活動場所の谷戸はほとんど民有地であり、そこでは現在も農業が営まれているので、「農家の応援団」を自認しながら里山保全活動を展開している。

設立当初は、谷戸を歩きながらの自然観察・調査等の「ながめる」活動が中心だった。しかし、1993年からは地主の許可を得て、畑を耕したり、水田を復元したりするようになり、「かかわる」活動へと変化した。1997年には会の活動に協力的な農家の指導のもとで、窯を使った本格的な炭焼きも始めた。会のメンバーが「恩田の谷戸」と呼ぶ谷戸は、ゲンジボタルの自生地であるほか、サワガニやホトケドジョウなど良好な水・水辺環境を表徴する生物が生息する。1998年に大規模な農地造成がおこなわれ、谷戸の大半は埋められて活動を開始した当初の風景は消えたが、それでも次の世代に谷戸の景観を残すために活動を続けている。

現在、会員数は約70名、コア・メンバーは10名程度である。コア・メンバーの構成は、男女比が6:4くらいで、年代は40～50代が中心である。

筆者は1998年11月に入会し、雑木林の下草刈り、落ち葉掻き、竹林の間伐、炭焼き、ホタル水路の清掃、ビオトープの創造、古代米作りなどを実践してきた。インタビューはコア・メンバーを中心に20名に対しておこなったが、ここでは4名を取り上げる⁹。この4名は、次章で分類する4つの参加動機タイプを、それぞれ代表していると判断して抽出した。

9 4人へのインタビューは、1999年7月10日(Tさん・1回目)、31日(Sさん)、8月4日(Fさん)、9月22日(Iさん)、2000年1月7日(Tさん・2回目)におこなった。なお、インフォーマントの年齢は、調査当時のものである。

2) 里山ボランティア活動への参加動機

(1) フィールドに「貼り付く」Tさん

Tさん(52歳、女性)は「もともと普通の主婦だった」。それが、隣人に誘われて植物観察をするようになり、いつしか近隣に住む3人で自然散策に出かけるようになった。散策をするなかで、「かたかごの森」(東京都町田市)という緑地を訪ねる機会があり、その場所をフィールドとしている「町田かたかごの森を守る会」の存在を知った。この会は、もともと私有地だったカタクリの群生地を保全するため、1985年、会が緑地の管理活動を引き受けることを条件にして、市に地権者との間で借地契約を結ばせたユニークな団体である。当時の自然保護運動では、自ら汗をかいて保全活動する団体は少なかったため、この会との出会いは衝撃的だった。これが契機となって、Tさんは市民運動へと向かうことになった。

1987年、まず「町田かたかごの森を守る会」に入会した。また、民間企業の社宅建設に反対して公園をつくろうという運動にも関わった。こうした経験を積み重ねながら、自宅近くに計画された区画整理事業への反対運動では、初めて運動の中心的な役割を担った。自らが発起人の1人となって、1989年10月に「成瀬の自然を守る会」(東京都町田市)を結成し、反対署名を集め、陳情・請願をおこなうなどの典型的な開発反対運動を進めた。結果的には、一部緑地が保護されたほか、残存した公園緑地の維持管理を任せられることになった。

恩田の谷戸は、このとき残された緑地と尾根道を挟んで隣接している。町田市在住のTさんは、恩田の谷戸も永続的に残せないものかと考えていたが、隣の行政区にあるため静観していた。ところが1991年6月、ホテルを見に谷戸へ足を運んだとき、TさんがOYFCを設立するきっかけとなる出会いをする。それは、谷戸で農業を営むある地元農家との遭遇だった。Tさんはその人から、「田んぼや畑をやっている、子どもがいたずらして困る。畦を壊したり、水を抜いたりする。だから、テニスコートやゴルフの練習場にするんだ」と聞かされた。すぐに強い危機感を抱いたTさんは、何か行動に訴えようと急いで数人の地元住民を集めた。直後、その開発構想は地権者の合意が得られず流れたが、近いうちに別の開発が持ち上がるかもしれないから有志が集

まったときに団体を立ち上げようと、1991年8月にOYFCを発足させた。

会を設立した後、Tさんはできることから始めようと考えた。地元農家が指摘していた子どものいたずらのことが耳に残っていたので、本当にそのようなことがあるのか確かめるため、谷戸田を見回る「田んぼパトロール」を始めた。パトロールといっても、週に3～4回、小学校が終わる時間帯に谷戸をぶらぶら歩くだけだった。ほとんどの場合は無駄足に終わったが、歩くことによって、谷戸で農業を営む人びとや地権者と顔見知りになり、気軽に話せる間柄になった。このようにして信頼関係を築いたことが、のちに土地を借りて田畑で耕作したり、農家の指導のもとで炭焼きを体験したりするなど、会の活動を広げていくことにつながった。

Tさんは、こうした活動を継続的におこなうことで、OYFCのメンバーがフィールドに「貼り付いて、実践的な作業をしていけば〔行政に〕アピールできるだろう」と考えている。だから、どのような動機・頻度で活動に関わるかは問わずに、会員が「かかわる」活動を楽しめるように配慮している。多様な活動に目を奪われやすいが、Tさんの目標は、あくまでも恩田の谷戸が保全対象となり、開発されるおそれがなくなることにある。

(2)「会社人間」から「地域人間」へ転身したIさん

Iさんは、定年の3年前に「おやじの腕まくり」というキャッチフレーズの横浜市青葉区主催の講座に参加した。その内容は、定年後に「会社人間」が「濡れ落ち葉」にならないようにと、自分の住んでいる地域を知るために街を歩いたり、料理を作って家族に食べさせたり、老人ホームでボランティア活動を体験したりするものだった。Iさんの言葉を借りれば、「会社人間とか横浜都民とか言われていて、子どもは女房任せ、町内は知らないよという親父の意識改革を狙ったもの」だった。「会社人間から地域人間になろう」と転身が目指されていたのである。

40数名の受講者がいて、そのうちの30名弱の同窓生が「おやじの腕まくり」という団体を結成した。年齢構成は50代が中心で、主な活動内容は、夏休みに地区センターで「子どもの工作塾」を開き、子どもに手作りおもちゃを教えることである。

Iさんは「おやじの腕まくり」を出発点として、その後、いくつかの市民団体に所属することになる。まず、同じ「おやじの腕まくり」のメンバーが代表を務める「早渕川をかなでる会」(横浜市都筑区)という川をフィールドとしている団体に入った。その代表がOYFCの会員でもあったので、1994年頃にはOYFCに入会した。さらに、「あおばく・川を楽しむ会」、「AOBA EVENT STAFF」(ともに横浜市青葉区)などにも所属している。

Iさんは、妻から雑木林の下草刈りについて、「よその草刈ってどうすんの。一銭にもならないのに」と言われると、「たしかにそのとおりだと思う」そうだ。また、「体を動かすのが好きか嫌いかと聞かれたら、ごろごろしている方が好きなんだけどなあ」と正直に話す。それなのに、なぜ熱心に市民活動に参加しているのだろうか。Iさんは次のように答える。「定年後の生活のリズムをつくるとき、積極的に打って出ようと考えたんだよ。違うジャンルのなかで体を動かしながら、いろいろな人と出会う。そういうリズムを選んだんだよ。…せっかく何かやるなら、楽しまなきゃいけない。のめり込むと充実感を味わえるよ。そうしないと面白くない」。

(3)「体にいいレジャー」を楽しむSさん

Sさん(42歳、男性)は、昔から山が好きだったので、学生時代にはサークル仲間と2,000~3,000m級の山を求めて登りに出かけていた。今でも日帰り登山を楽しむほか、散歩も趣味にしている。

1988年、恩田の谷戸のそばに引っ越してきた。散歩がてら近所を歩いたら、Sさんの原風景である谷戸を発見した。3歳から25歳まで横浜市港北区で育ったSさんにとって、谷戸は「当たり前の世界」だった。その原風景がみえる消失していったなかで、恩田の谷戸には「昔のまま」と思わせる景観が残されていたので、気になるようになった。

あるとき友人から、恩田の谷戸でホテルが見られることを聞かされた。「ホテルを見たい」と思ったSさんは、友人から紹介されたOYFCの会員と連絡を取り、谷戸を案内してもらった。恩田の谷戸でホテルを見て感激したSさんは、すぐに入会を決めた。

入会してもしばらくは自治会の役員をやっていたため、ホテルの発生期以

外、ほとんど活動に参加していなかった。しかし、役員の任期が切れてからは、子どもと一緒にOYFCの活動に参加することが多くなった。Sさんは金融機関に勤めているので、「プライベートな時間は仕事と対極的なことをしたい。数字に追われない時間を過ごしたい」という欲求がある。だから、「外で体を動かすのが好き」であり、「雑木林の管理にエネルギーをかけたい」と思っている。下草刈りなどの作業は、「お金もかからず、極めて体によいレジャー」と捉えている。また、OYFCに関わることで、「職場と家庭だけの世界」から抜け出せることにも楽しさを見出している。

(4)「1時間で行って帰れる場所」で自然と触れあうFさん

Fさん(53歳、女性)は、Tさんと同じように、自然観察会を入口として市民活動に関わるというルートをたどってきた。自然散策が好きなFさんは、町田市内に残された里山を案内してくれる観察会があることを市の広報で見つけ、しばしばそれに参加していた。その観察会の講師を務めていたのが「町田の自然を考える市民の会」(東京都町田市)という自然保護団体のメンバーだったので、まずはそこに入会した。次に入会したのは、Tさんらが代表者を務める「成瀬の自然を守る会」だった。この会が区画整理事業への反対署名を集めることをねらって大規模な観察会を開いたとき、活動場所が家から近いので入会することにした。

1991年にOYFCが設立されたとき、恩田の谷戸の近くに住み、「成瀬の自然を守る会」の会員でもあったFさんは、Tさんから入会の勧誘を受けた。実のところ恩田の谷戸は、Fさんが勝手に「裏山」と呼んでいた場所で、夏の夜には子どもを連れてしばしばホテル鑑賞に出かけていたところだった。つまり、Fさんにとってはきわめて身近な場所だっただけに、そこが活動場所だと聞いてすぐに入会を決めた。

OYFC入会後は、「[仕事をしていて]土日しか動けない立場では、あっちもこっちも[参加するのは無理]だから、活動場所が家から遠い「町田の自然を考える市民の会」からは足が遠のいていった。そのような「行くと日帰り旅行になってしまう」場所ではなく、「1時間で行って帰れる場所」にある恩田の谷戸に頻繁に足を運ぶようになった。

この距離的な近さと会のゆるやかな運営体制ゆえに、FさんにとってOYFCは「構えずにいられる」団体として感じられている。Fさんが設立当初から今まで続けられた理由は、彼女の言葉をそのまま使えば、その「フリー」などところにあるという。

4. 里山ボランティアの参加動機と活動の意味

1) 参加動機による類型化

前章の4名を含むOYFCの会員20名と、本稿では取り上げることができなかった2団体22名へのインタビュー調査の結果から、代表的な里山ボランティアの参加動機を2軸「里山保全が主目的—里山保全は副次的目的」、「他人と共におこなう—自分がおこなう」に展開し、4タイプに分類したのが図1である。

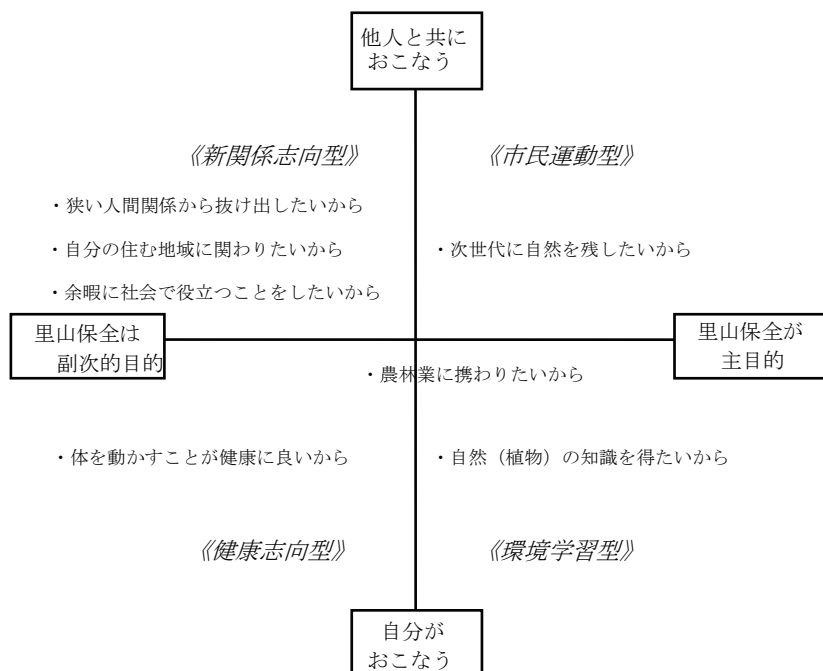


図1 里山ボランティアの参加動機

「次世代に自然を残したいから」は、Tさんなどに典型的な参加動機で、団体の中心メンバー、小学生程度の子どもを持つ親などに特徴的にみられる。これは、自然保護運動の理念として掲げられることが多いので、「市民運動型」動機とした。「自然(植物)に関する知識を得たいから」は、Fさんなどの参加動機で、自然(植物)が好きで、生涯学習として観察会に参加するような人に多く、子どもから手が離れた40代以降の女性に特徴的である。これは、「環境学習型」動機とした。「農林業に携わりたいから」は、農作業を通じて自然を学びたいという人や、循環型農業を基盤にした社会を構想している人などの参加動機で、「市民運動型」「環境学習型」の双方がありうる。

「狭い人間関係から抜け出したいから」は、Iさん、Sさんなどにみられる参加動機で、家と会社を往復するだけになりがちな「会社人間」や、家に閉じこもりがちの主婦などに特徴的にみられる。「自分の住む地域に関わりたいから」は、自分あるいは夫が「転勤族」であるため地域に根を下ろしたいと考えた人や、身近な場所にフィールドを持ちたいと思った人などにみられる。「余暇に社会で役立つことをしたいから」は、Iさんなどの参加動機で、定年後の余暇を有効に使いたいと考える人や、子育てが終わった主婦などに特徴的にみられる。これら3つの動機は独立しているのではなく、狭い人間関係を抜け出すために自分の住む地域に関わろうとしたり、余暇に社会で役立つことをしたいから地域に関わろうとしたりすることが多くみられることから、緊密な相関関係があるとしてよい。そこで、これらの参加動機の共通項を抽出すると、それは現状の社会関係と異なる新しいネットワークを創り出そうとしていることがわかるので、「新関係志向型」動機とした。

「体を動かすことが健康によいから」は、Sさんなどに典型的な参加動機で、アウトドア活動が好きな人、一度大きく体を壊して健康管理に気を配っている人、普段は体を動かす機会に恵まれていない人などに特徴的で、「健康志向型」動機とした。

2) 里山ボランティアにとっての保全活動の意味

里山ボランティアへのインタビューから、ボランティア活動への参加動機がきわめて多様なことがわかる。このうち、市民運動型とは主に団体の代表

クラスが運動理念として掲げているものであるが、それ以外の人でこれを挙げた人は少なかった。また、環境学習型が参加動機として挙げられていることは、里山ボランティアにとって、活動が環境学習機会として位置づけられていることを意味する。この2タイプの参加動機を森林(里山)ボランティア論との関係でみれば、市民運動型が「担い手」、環境学習型が「学習者」にそれぞれ相当し、ともに里山保全に貢献しうる動機であることがわかる。

さまざまな参加動機の中でも最も多く、かつ注目すべき動機は、新関係志向型である。こうした動機が語られることは、中野の議論を踏まえると、「個人化のポテンシャル」に伴うアイデンティティ不安への個人的対応が現れていると解釈できる。つまり、別様でもありうる可能性を知覚した人びとが、揺らぎ始めたアイデンティティを再び確立するため、現状の社会関係とは異なる新しい関係を築こうとしているように理解できる。たとえば、「自分の住む地域に関わりたから」は、どの地域にも帰属意識を見いだせない人が「自由の閉塞性」に対処するために、一方、「狭い人間関係から抜け出したいから」と「余暇に社会で役立つことをしたいから」は、それまでの社会関係とは違う新たな関係を取り結べるという「自由の可能性」に対応して、それぞれボランティア活動に参加しているとみなすことができる。そうすると里山は、保全活動が実践される場であるだけでなく、「個人化のポテンシャル」に伴うアイデンティティ不安に対応する人びとにとっては癒しの場としてもみなされうる。そればかりか、健康志向型の参加動機が挙げられていることを鑑みれば、ボランティアにとっての里山は、心身の健康づくりの場として認識される可能性もある。したがって、里山ボランティアを議論する場合、自然生態系の保全活動に対する貢献という観点から眺めるだけではなく、同じフィールドに関心を寄せる仲間同士で社会関係を築いている事実にも目を向けなければならないのである。

このように「個人化のポテンシャル」という概念を用いると、ボランティアの参加動機をうまく説明できる。しかし、そのことからボランティアが政治的にコントロールされていると解釈することはできない。むしろ実態は、里山ボランティアのなかに各種ボランティア養成講座・研修を受講した卒業生が多いのは事実であるものの¹⁰、そうした人びとにとっての活動の意味はさ

まざまであり、ひとくくりにすることはできない。OYFCの場合、フィールドが民有地なので地権者との関係に気を遣うところがあるものの、活動に関しては、「やりたいことをやる」という姿勢が貫かれている。メンバーの素顔を垣間見て感じられるように、里山ボランティアだからといって、あまり肩肘に力を入れないからこそ、しなやかで心地よい活動が展開でき、その結果として、社会システムへの水路づけに対抗する力が潜在されているように思われる。

5. 里山ボランティアの〈自律性〉

1) 里山モニタリング能力の獲得

今日の里山ボランティア養成施策は、「担い手」を力づくで動員するようなものではなく、ボランティアは里山という場で活動することを共通項としながら多様な動機で参加している。しかし、批判理論の立場では、里山ボランティアが推奨され、そのための養成施策が講じられてボランティア人口が増えている現象を、環境配慮的・ボランタリーの性向を身に付けさせて、自発的に「担い手」を引き受ける人びとを作りだしている巧みな動員とみなすかもしれない。そこで最終章では、こうした社会にあって、里山ボランティアが政治的なコントロールに抵抗するすべを確保しつつ、同時に里山保全に役立つ活動を実践するための条件を検討したい。

一般に、ボランティア活動が、同じように自発性・無償性を有する合唱・茶道などの文化サークル活動と異なるのは、公益性の有無である。しかし、公益性とは社会的な文脈に依存するので、同じ行為がボランティア活動とみなされたり、そうでなかったりすることがある。たとえば、かつては里山林を伐採して、そこにスギ・ヒノキの人工林を植えることが勧められたが、現在では、こうした行為が里山の生態系を損ねるものとして非難されることもある。

したがって、ボランティアは、社会システムから完全に自律的な存在とはなりえない。そのことを承知の上で、ボランティアが自律的であろうとする

10 こうした講座・研修を受講した後に里山保全NPOに入会した人数は、インタビュー対象者42名のうちの19名で、半数近くに及んでいた。

ならば、自らの行為を反省的に捉えかえす指標を意図的に確定することが求められる。そして、このモニタリング指標に照らし合わせて活動の意味を見出し、その意味を受け取りながら自発的に活動する限りにおいて、里山ボランティアは〈自律性〉(=括弧付きの、限定的な自律性)を確保できると考えられる。

この場合の指標としては、生物の多様性や林相構造の複雑さなどがすぐに思いつくけれど、必ずしも生態学的な指標である必要はない。今日の里山は、生き物にとって貴重な生息空間であるだけでなく、人間にとっても環境学習・レクリエーション・文化伝承の場などとして重要なので、どのような里山をめざして活動するのか、その目標設定は開かれていてよい。

さて、里山ボランティアが活動成果を自己評価しているのか探してみると、そういう例は少ない。この理由としては、豊かなコミュニケーションを図り、気持ちのよい汗をかくことを強く求めている人びとが多いので、自省する機会に乏しいという現実がある。しかし、もっと深い理由は、多くの里山ボランティア活動が、樹木を伐り、下草を刈り、落ち葉を集めるという、かつての里山で普通に見られた活動を追体験するものと考えられているからではないだろうか。

このことに関して、実際に東京都立桜ヶ丘公園であった興味深い事例がある。里山ボランティアが、地域に伝わる昭和30年代の管理手法をまねて、樹木を伐採してから数年間放置したところ、当時よりも土壌の栄養条件が良いためにササが背丈以上に繁茂して、手入れする前よりも生物相が貧弱になったことがあった。この例では、ボランティアが里山の質を評価できなかったため、ササが密生するような荒れた状態になっても、従来のやり方で管理しているのだから問題ないはずと考えられていたのだった(武内ほか編, 2001)。

別の例もある。筆者の知る里山ボランティア養成講座では、活動を体験することに重きが置かれるため、鎌や鉋などの道具の持ち方から始まり、その扱い方、伐った木の並べ方、刈った草の集め方などが、受講者に向けて丁寧に説明されてきた。鎌を持ったこともないような初心者が対象なので、まずは里山に入って体験することが重要であると考えられ、講座の内容が構成され

てきた。しかし、その後のフォローなく受講者は里山ボランティアとなるので、一部では、活動成果を省みる視点を欠いたまま、無計画に木を伐ったり、藪を見つければ画一的にすべて刈り払ったりするという場当たりの活動を生みだしている。

このように、里山ボランティア活動では、目的が不明確で、目標に照らした達成状況を把握する指標がないという例は少なくない。したがって、里山ボランティアがモニタリング能力を獲得することは、政治的コントロールに抗する〈自律性〉を持つことになると同時に、ボランティア団体が目標とする里山像に向けて前進しているどうかを確認することで、より効果的な活動へと改善していく手助けともなるはずである(松村, 2007)。

2) 里山の生物多様性と多様なボランティア

ここで示したモニタリング能力の獲得とは、自然環境のモニタリング調査能力が必須であるというように狭く捉えるべきではない。里山ボランティアにはそういう能力が必要であるという考えが広まると、さまざまな動機を持った人が集まることで賑わいのある空間となっていた里山が息苦しいものになるだろう¹¹。

前章で明らかにしたように、里山ボランティアは、人と里山との関係だけでなく、里山を介した人と人との関係も取り結んでいる。したがって、〈自律性〉を確保するためにボランティアが指定する指標は、一見すると里山保全と無関係にみえるものが含まれていてもおかしくない。たとえば、「新関係志向型」の人は、入会後にできた友人の数を、「健康志向型」の場合は、自分の血圧値をモニタリング指標とすることもあろう。こうした指標を認めることは、生き物にとっての里山の重要性を無視するものではない。むしろ、さまざまな指標を持った人びとが共存できるためにも、里山の生態系は積極的に保全されることが望ましい。なぜなら、良好に保全され、高い生物多様性を誇る里山の場合、たとえば、貴重種となっているカタクリの株数やゲン

11 筆者は、このように生態系の健全性を根拠にして、人びとを一定の方向へ導こうとする力を「生態学的ポリティクス」と呼び、この力に抗う方策を検討した(松村, 2007)

ジボタルの発生数を、活動成果を自己評価するための指標にできるからである。そして、さまざまな生き物に誘われて多様な人びとが集まれば、「新関係指向型」の人にもよいだろうし、そのための環境づくりに汗を流せば、「健康志向型」の人も楽しめるだろう。

さまざまなモニタリング指標を持って参加する人がいると、同じフィールドで活動する者同士が衝突することは生じうる。実際にOYFCのなかでも、自然観察派と肉体労働派とが活動内容をめぐって衝突したり、植物愛好家と昆虫愛好家とがいかに里山管理をおこなうかをテーマに議論を戦わせたりすることがある。しかし、このような衝突は、かつて里山にあった生活者の実践を模倣しているような水準では起こりえないことであり、個々のボランティアが自分たちの活動を評価できるから生じるものである。したがって、この場合は、それぞれのボランティアにとっての活動の意味を生かすかたちで、組織全体としては里山を保全できるような合意をめざすべきであろう。たとえば、貴重種が生息しているところは、それを指標種として管理計画を考えたり、かつて耕作放棄地だったところは老若男女が集える広場として整備したり、竹林は竹文化を伝承するために工芸用の材料を提供する場として手入れするなど、適当にゾーニングすることが考えられる。また、人工林の単一植生だったところは複相林化して、素材生産も考えつつ生物多様性を増やすことによって、いくつもの目標を実現できるような里山づくりも考えられる。

以上から、里山ボランティアがモニタリング能力を獲得することは、さまざまな人びとが〈自律性〉を確保し、それぞれの活動の意味を感じ取りながら関われる里山をつくることと、生物多様性を保全するために里山の生態系を守ることを、同時に達成するために必要と考えられる。

文献

Beck, Ulrich, 1994, Anthony Giddens & Scott Lash, Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order, Polity Press. (= 1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房.)

- 長谷川公一, 2000, 「市民が環境ボランティアになる可能性」鳥越皓之編『シリーズ環境社会学 1 環境ボランティア・NPOの社会学』新曜社: 177-192.
- 石井実・植田邦彦・重松敏則, 1993, 『里山の自然をまもる』築地書館.
- 北尾邦伸, 2005, 『森林社会デザイン学序説』日本林業調査会.
- 蔵治光一郎・洲崎澄子・丹羽健司編, 2006, 『森の健康診断—100円グッズで始める市民と研究者の愉快的森林調査』築地書館.
- 倉本宣・内城道興, 1997, 『雑木林をつくる一人の手と自然の対話・里山作業入門』百水社.
- 松尾英輔, 2005, 『社会園芸学のすすめ—環境・教育・福祉・まちづくり』農山漁村文化協会.
- Melucci, Alberto, 1987, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press. (= 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳, 1997, 『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- 守山弘, 1988, 『自然を守るとはどういうことか』農山漁村文化協会.
- 中川重年, 1996, 『再生の雑木林から』創森社.
- 中野敏男, 1999, 「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27(5): 72-93.
- 松村正治 2007 「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方—身近な環境調査による市民デザインの可能性」『環境社会学研究』13: 143-157.
- 仁平典宏, 2005, 「ボランティア活動とネオリベラリズムの共振関係を再考する」『社会学評論』56(2): 485-499.
- Olson, Mancur, 1965, *The Logic of Collective Action: Public Goods and the Theory of Groups*, Harvard University Press. (= 1983, 依田博・森脇俊雅訳『集合行為論—公共財と集団理論』ミネルヴァ書房.)
- 大澤真幸, 2000, 「責任論—自由な社会の倫理的根拠として」『論座』57: 158-199.
- 林野庁, 2007, 「森林づくり活動についてのアンケート集計結果 (平成19年3月調査)」(<http://www.rinya.maff.go.jp/j/press/h19-5gatu/0511moridukuri-2.pdf>, 2009.3.30).
- 盛山和夫・海野道郎編, 1991, 『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社.
- 渋谷望, 2003, 『魂の労働—ネオリベラリズムの権力論』青土社.
- 重松敏則, 1991, 『市民による里山の保全・管理』信山社.
- , 1999, 『新しい里山再生法—市民参加型の提案』(社)全国林業改良普及協会.
- 武内和彦, 1994, 『環境創造の思想』東京大学出版会.
- 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編, 2001, 『里山の環境学』東大出版会.

鳥越皓之編, 2000, 『シリーズ環境社会学 1 環境ボランティア・NPOの社会学』新曜社.
内山節編, 2001, 『森の列島に暮らすー森林ボランティアからの政策提言』コモンズ.
上原巖, 2005, 『森林療法のすすめー癒しの森で心身をリフレッシュ』コモンズ.
山本信次, 1998, 「市民参加活動における『林業教育』と森林管理」『林業経済』596: 25-32.
山本信次編, 2003, 『森林ボランティア論』日本林業調査会.